

平安文学の 古注釈と受容

第三集
陣野英則 編
緑川真知子

武蔵野書院

平安文学の古注釈と受容

第三集

目次

特集 1 古典のメタモルフォシス

エッセイ 古注釈との出会い

□イヤル・タイラー 2

『源氏物語』における女房たちの役割

——ヘンリー・ジェームズと

ミハイル・バフチンの文学理論を背景として—— H. マック・ホートン 6

『源氏物語』と女体夢幻能——「源氏能」はどのように成立したのか—— 山中玲子 21

もう一つの「注釈書」

——江戸時代における『源氏物語』の初期俗語訳の意義—— レベッカ・クレメンツ 39

理想的な愛の対象 (Object of Desire)

——少女漫画とレディースコミックにおける『源氏物語』—— リン・K・ミヤケ 56

ヤマタ・キクによる仏訳『源氏物語』——出版の背景と受容の様相—— 常田檀子 79

卷頭言……………iv
執筆者紹介……………249
あとがき……………248

翻訳以前——『源氏物語』が世界文学になった時——

マイケル・エメリック 97

ウェイリーと共に寝所へ

——紫式部はどのように世界文学となったのか、

或いはならなかったのか——

ヴァレリー・ヘニチュック

訳 緑川真知子 119

『源氏物語』——読むことと翻訳すること——

マリア・テレサ・オルシ 147

特集
2 動く枕草子

『枕草子』の「いとほし」に関わる本文異同

——三巻本と能因本の比較検討を中心に——

陣野英則 159

堺本枕草子の本文系統の分類について

山中悠希 189

『枕草子』ボジヤール訳とモリス訳

——モリス所蔵ボジヤール訳書き入れなどをめぐって——

付 枕草子英仏訳章段対照一覧表

緑川真知子 207

『メタモルフオシス (metamorphosis)』は周知の如く、古代ローマの詩人オウディウス (オーヴィッド) の『変身 (変身) 物語』 (メタモルフオセスー metamorphosis) は複数形などで知られている言葉で、転身、変身、変容などを意味するラテン語です。今回、特集「古典のメタモルフオシス」と銘打って、平安文学の、特に『源氏物語』の受容的側面に比重をおいた内外の研究の方々の論考を集めました。どれも読み応えのあるものとなっています。

『源氏物語』の新英訳をなしたロイヤル・タイラー氏には、個人的な経験にまつわる古注釈についてのエッセイをお寄せいただきました。近年海外においても古注釈の研究を専門にする方々が少しずつ増えてきていますが、物語本文を素通りし、ましてそれらを蔑ろにしての古注釈の研究などありえませんが、現代の解釈を棚上げしてしまうこともあってはならないはずで、翻訳者にとって現代の専門家の注釈のほうが筋が通るといふ氏の言葉は、『源氏物語』の英訳という膨大な翻訳作業をなさった人の言葉として興味深いものです。

更に初原典からのイタリア語訳が完成間近いマリア・テレサ・オルシ氏からも、翻訳行為と世界文学という問題について、その本質に触れる御論を寄せていただくことが出来ました。氏の論の行間からは、異なる文化、異なる教養を背景としながらも翻訳者が真摯に本文と読者に向かい合う姿を垣間見ることが出来ます。

『源氏物語』が数多くの外国語に翻訳されているという事実から、近年とみに「世界文学」という概念の把握に学の興味が向かう傾向もあるようです。二十一世紀の時間の経過の中であって、この概念はかつてより重要な色彩を帯びてきそうではありますが、しかし実のところはゲーテが言い始めたこの言葉の響きに囚われるばかりでその定義は難しいものです。そのためか「世界文学」に少なからず抵触する論が、マイケル・エメリック氏を初め、期せずして幾つか並びました。中でも日本文学の専門家ではない、比較文学の世界からのヴァレリー・ヘニチュック氏の論は、「世界文学」に端を発しながら、翻訳論を通じた女性論・性差論となっています。これはもと海外の雑誌に英語で発表されたものを邦訳したわけですが、日本古典文学を専門とする方々に、こうした視点で書かれた論文が英語で発表されているという事実をまずは知っていただき、更にもと英語で発表されているので、その読者層は想像を遙かに超えて広く、影響力もあるということも認識していただければと思います。日本古典文学を専門としていない他分野の研究者が、欧米で出された専門家の論文を消化吸収し、自説を披けるその片鱗を垣間見ることが出来ます。まさに異言語、異文化、異分野など多層的なメタモルフオシスの過程を経て一人歩きしていく「源氏物語」の現出があると言えましょう。

二〇〇六年に新しい『枕草子』英訳が出たことでもありますし、特集2においても、『枕草子』をめぐる論者を三本収録いたしました。

今回、画像資料掲載許可の申請など煩雑な仕事の他、海外の諸先生とのやり取りも多く、武蔵野書院の前田智彦社長にはひとかたならぬお世話になりました。記して感謝申し上げます。